

多様な社会に咲く美しい音楽 現代の台湾音楽紹介

ラジオパーソナリティ・ナレーター・ライター 石井 由紀子

「台湾音楽」というと、どんなイメージを思い浮かべるでしょうか？「台湾」も「音楽」も、各人が持つイメージが違うので一言では表せない。もしくは、「台湾」のイメージはあるけれど、そこに「音楽」という言葉が加わると急に解像度が低くなってしまいます。そんなこともあるかもしれません。

ご挨拶が遅くなりました。私、石井由紀子と申します。今回は、「台湾音楽」、特に現代の台湾でのポップミュージックを中心に、お話をさせていただきます。台湾への見識が深い皆様が読んでいらっしゃるの、非常に緊張をしておりますが、どうぞよろしくお願ひします。

もう少しだけ私のことをお話しさせて下さい。私は、ラジオパーソナリティやナレーション、司会などのいわゆる声の仕事をしています。もともと音楽がとても好きで、毎年のように国内のロックフェスに行き、ライブに定期的に出かけ、気になる音楽があれば聴くという、音楽が占める割合が高めの人生を送っています。

台湾人の友人ができたことをきっかけに、台湾の音楽をたくさん知り、そこから見えてくる台湾社会を知りました。そして、台湾音楽を理解するには、台湾の歴史や文化など、さまざまなことを知らないといけないと感じ、台湾のことを少しずつ勉強しています。

アイコンがないことが、音楽のイメージを曖昧にする？

音楽マニアではない日本の友人・知人に「台湾の音楽が好きだ」と言うと、大抵の人から首を傾げられます。そこで、Apple Musicなどで数曲聴いてもらうと、ほぼ全員から「かっこいいね、

オシャレだね！」と高評価をもらうのと同時に、「台湾音楽って、歌謡曲とか演歌みたいな感じのだった。」と言われることがあります。1981年生まれ私ですが、自分の年齢からマイナス5歳からプラス10歳くらいまでの世代の人たちに、そのようなことを言われることが多いように感じています。(交流するのが、このくらいの世代の人が多いためだけかもしれませんが。)

「台湾音楽＝歌謡曲」のイメージを持つ人は、おそらく子どもの頃に観た音楽番組が影響しているのではないかと思います。「台湾音楽」という言葉を聞くと、ブラウン管の向こう側で歌う、テレサ・テンや歐陽菲菲などの台湾から来たスター歌手を家族で見た光景が浮かぶ。「台湾」に「音楽」という言葉が結びつくと、一家団欒の思い出が呼び起こされるのではないのでしょうか。

90年代に入ると、ビビアン・スーが絶大な人気を誇り、「タイミング」が大ヒットしましたが、(2022年に、TikTokで再び火がつかしました。)彼女のいた音楽ユニット、ブラックビスケッツはバラエティ番組の企画で生まれたものですので、やはり歌手よりもタレントのイメージが強いかと思います。そう考えると、台湾出身の歌手で、お茶の間レベルにまで浸透した人物が、80年代以降に見当たらなかったことで、「台湾音楽＝歌謡曲」というイメージが残ったのではないかと考えています。

例えば韓国の音楽は、今でこそK-POPのキラキラしたイメージがあり、BTSなどファンでなくても名前は聞いたことがあるグループがいますが、20年以上前でしたら日本の歌謡曲界で活躍した方々のイメージが強かったと思います。韓国を除くアジアの音楽全体で共通していることです

が、日本での分かりやすいアイコンがない、もしくは更新されていないことが、その国や地域の音楽の輪郭を曖昧にさせてしまう一因かもしれないと、私は考えています。

実際の「台湾音楽」は百花繚乱です。

しかし実際の台湾音楽は、多種多様でカラフル。そして表現する内容の幅が広く、言葉が通じなくても心が動かされる、とても素敵な作品に溢れています。伝統音楽やクラシック音楽もありますし、ポップス、ロック、ヒップホップ、R&B、ジャズもありますし、歌謡曲もあります。日本の音楽が、アニソン（アニメソング）だけではないのと同じように、台湾にもさまざまな音楽が存在し、それぞれが好きな音楽を聴いています。

台湾にも日本と同じようにレコード会社も多数あり、北米などに本社を持つ世界規模の企業も進出していますし、台湾資本や日本資本の大手レコード会社、そして小さなレコード会社もたくさん存在しています。事業規模が小さい会社は、大手に比べて制作費や宣伝費の予算が小さいことはありますが、インターネットが発達した今、クラウドファンディングで制作費を募り、SNSを駆使して宣伝するなど、さまざまな手法でリスナーに音楽を届けています。また、自身でそのような活動をするアーティストもいます。事業規模によって諦めなければいけないことは、20年以上前と比べれば減っているようにも感じますし、アーティスト同士のコラボレーションや交流もしやすくなっているように感じます。この動きは台湾だけではなく、世界で共通していることかと思えます。

さて、ここからは、いくつかのトピックに分けて、台湾音楽の世界をご紹介します。

多民族・多言語は音楽も同じこと。

台湾の多民族、多言語は、音楽にも反映されています。中国語、台湾語、客家語、そして各原住民語と多種多様な言語で歌が歌われています。自分が表現したい世界、自身のルーツなどに沿って、歌う言語をチョイスしています。中華民国文化部主催で、毎年発表されている台湾の音楽アワード「金曲獎」(Golden Melody Award)においても、

主要な部門賞は音楽ジャンルではなく、歌唱している言語別に区分されていることも、台湾が多言語であることを表しているように感じます。

その言語を理解できるコミュニティだけで、特定の音楽が聴かれているのではなく、中国語以外の言語で歌唱するアーティストの音楽でも、Apple MusicやYouTubeの再生回数が数十万回、数百万回、中には数千万回を超えることがあることから、多言語の音楽が台湾の社会に溶け込んでいることが分かります。

台湾語で歌うロックバンドもあれば、客家語で歌う音楽ユニットもあります。世代や性別に関係なく、自分たちの表現したいことに適した言語を選び、魂を込めて歌っているのです。

原住民パイワン族の女性シンガーソングライター阿爆 (ABAO) は、台湾で広く知られた存在です。彼女は、ポップスからR&B寄りの音楽を制作しますが、言語として選んでいるのは、自らのルーツであるパイワン語です。2020年の第31回金曲獎では、アルバム『kinakaian 母親的舌頭』が、年度アルバム賞と最優秀原住民語アルバム賞、そして同アルバム収録曲「Thank You」が年度楽曲賞を受賞しています。その年を代表するアルバムに贈られる年度アルバム賞、そしてその年を代表する楽曲に贈られる年度楽曲賞、その両方を使用人口が多いとは言い難いパイワン語の作品が受賞したことは、非常に興味深いことと感じています。

年度楽曲賞「Thank You」は、ゴスペル調の曲でコーラスには英語が混じります。阿爆 (ABAO) の少しハスキーで温かみのある声が、非常に曲の雰囲気合っていて、言葉が分からなくとも聴いていると晴れやかな気持ちになります。おそらく、パイワン語が分からない台湾の方々も私と同じような気持ちで、この曲を聞いているのではないかと思います。ちなみに「Thank You」のMV (ミュージックビデオ) のYouTubeでの再生回数は、2023年10月中旬の時点で310万回を超えています。

阿爆 (ABAO) は、中国語で歌う人気アーティストとコラボレーションするなど、非常に幅広い音楽活動を展開しています。さらには、原住民アーティストの才能を育み支える、文化的組織も設立

するなど、自身の創作活動だけではなく、パイワン族を始めとする原住民文化に広く貢献することにも力を入れています。

英語歌唱も台湾音楽を彩る。

“多言語”という面で捉えると、英語で歌唱するアーティストやバンドも、日本に比べると格段と多いように感じます。アメリカに留学し、台湾に戻ってから音楽活動をするアーティストもいます。その代表格が、9m88ではないでしょうか。アメリカNYの大学でジャズ&コンテンポラリー音楽を学び、ファッションセンスも抜群の女性アーティストで、9m88と書いてジョウエムバーバーと読みます。(アルファベットの「m」以外は、中国語の数字読み。)彼女は英語でも中国語でも歌唱をします。ジャズをベースにして、ソウルやファンクの要素があるR & Bの音楽に、少し90年代を感じるサウンドを織り交ぜる、非常にクールな音楽を発表し、台湾の若者から支持されているアーティストの一人です。

9m88は、2019年に日本のロックフェスティバル、サマーソニックにも出演した経験もあり、日本の音楽ファンにも知られています。今年10月に4年ぶりに来日し、渋谷でライブを開催しました。私も見に行きましたが、ライブ会場のお客さんの構成は、6割近くが日本人で、残りの約4割の大半は台湾人と思われる中国語話者、残りは北米系と思われる英語話者といった感じで、会場内は3ヶ国語が飛び交っていました。

彼女が日本で知られるようになったキッカケは、フェス出演以外にもう一つあります。それが2017年頃にアジアで巻き起こった、竹内まりや「プラスチック・ラブ」旋風です。当時、台湾を含むアジア圏で日本のシティ・ポップが空前のヒットとなり、若者が集まるナイトクラブでは、DJが日本のシティ・ポップの楽曲を流していました。その中でも格別の人気を誇っていたのが、竹内まりや「プラスチック・ラブ」で、もはや“シティ・ポップ＝プラスチック・ラブ”という不思議な現象が起こっていました。

このブームを牽引した一人が、9m88ではないかと思います。彼女が公開した「プラスチック

ク・ラブ」をカバーしたMVは、80年代の人気音楽番組を彷彿とさせる空間で、当時のアイドルのような衣装を着た9m88が歌っているもので、とてもポップでキュートです。ちなみに、このMVは2023年10月中旬の時点で、YouTubeで206万回再生されています。

先日のライブで彼女が観客に、どうやって日本の人たちは、私の音楽を知ったの?と尋ねると、客席からは、「ラジオ!」という声や「プラスチック・ラブだよ!」という声が上がっていました。ライブでは「プラスチック・ラブ」はもちろんのこと、彼女のオリジナル曲も数多く披露し、観客は彼女と一緒に歌ったり踊ったりする楽しい時間を過ごしました。



9m88

シティ・ポップの観点からの台湾音楽

1970年代頃、日本のポップスが洗練されていった中で、特に都会を感じるようなサウンドの楽曲に対して、いつの頃からかシティ・ポップという名前が付けられるようになりました。厳密な定義があるわけではなく、大貫妙子や竹内まりや、吉田美奈子、はっぴいえんど、山下達郎、細野晴臣など挙げればキリがないのですが、当時彼らが作っていた音楽がインターネットの発達に伴い世界中に広がり、今の若者に驚きと感動を与え、音楽制作にも一定の影響を与えている、というのが7~8年ほど前から語られているシティ・ポップ

ブームの概略かと思えます。特に、アジア圏での受け入れられ方の大きさに対して、日本では驚きと感動を持って紹介されているように感じます。

シティ・ポップという点から、台湾の音楽を見ていくときには、5人組バンド落日飛車Sunset Rollercoasterは、忘れてはならない存在かと思えます。日本のフェスにも出演し、来日ライブにも観客がたくさん集まる人気バンドです。アジアでシティ・ポップが流行しているというニュースが、日本の耳の早い音楽ファンに届いた頃に、台湾の代表的なシティ・ポップバンドとして、音楽系メディアで紹介されていたのが、落日飛車 Sunset Rollercoasterです。私の周りにはフェス好きや、音楽マニアの友人からも、“台湾アーティストは、9m88と落日飛車Sunset Rollercoasterは知っているよ。”と言われることもあります。

社会背景や問題も歌にのせて

シティ・ポップなど都会的な音楽の心地の良さも、台湾音楽の魅力の一つかと思えますが、私よりもっとも衝撃を受けたのが、歌に描かれるトピックスや背景の幅広さです。恋愛や日常のちょっとしたことを描いているものから、社会に横たわる問題や背景、そして歴史的な出来事まで、多種多様な事象をテーマにして作品が作られています。

音楽が社会と大きく繋がっている例としてまず挙げられるのは、滅火器 Fire EX. ではないでしょうか。彼らは台湾語で歌う、結成20年を超えたロックバンドです。「島嶼天光」(Island's Sunrise) は、2014年に起こったひまわり学生運動の応援ソングとして知られ、2015年の第26回金曲獎で、年度楽曲獎を受賞しました。

滅火器 Fire EX. は、台湾への誇りと愛情、そして弱い立場の人たちへの優しい眼差しを感じるバンドです。「島嶼天光」(Island's Sunrise) だけではなく、他の曲や彼らの行動からも、それを感じることができます。

前出のパイワン族のシンガーソングライター阿爆 (ABAO) の「tjakudain 無奈」という曲は、パイワン族の女性と漢民族の男性との恋愛を描いていますが、2人の間にはあまりにも大きな壁があることを感じさせるものです。この曲は、古く

からパイワン族に伝わる歌をベースに、台湾の人気ラッパー李英宏がラップを加えるなどして、再構築したものです。描かれているのは、違う民族であるために結ばれることはできないだろうという、やるせなさ。この曲のテーマを前時代的だと感じる人もいれば、同じような状況に立たされている人もいるかもしれません。恋愛がテーマですが、その背景にあるものや、違いがあるから生まれる障壁は、どのシーンにも存在していることを暗に示しているように感じています。

他にもさまざまな台湾アーティストが、言語やルーツに関係なく社会的な事象をテーマに制作活動をしています。“表現者の義務”というような大義名分の名の下ではなく、今、暮らしている場所に問題点があり、困っている人がいるならば、それを良くしていこうという、ごく自然な行動として音楽を制作しているように、私は感じています。

自由を求める魂を歌うポップスター

今までご紹介してきたアーティストも、もちろん台湾でも人気を博していますが、台湾のみならず、中華圏を中心にアジアで絶大な人気を誇るアーティスト蔡依林 (Jolin Tsai) も、社会で起こった事件に関する楽曲を発表しています。

彼女が2018年にリリースした「Womxnly 玫瑰少年」(バラの少年) は、2000年に台湾の男子中学生 葉永鋕が学校のトイレで変死した事件がモチーフになっています。彼は同級生から“女子っぽい”という理由で長年いじめを受けてきたこと、そしてこの事件が男女平等を目指す「両性平等教育法」が、「性別平等教育法」へ改称され、同性愛やトランスジェンダーなどの多様なジェンダーが語られるようになったことに大きく関わっているのを、ご存知の方もいらっしゃるかと思います。

「Womxnly 玫瑰少年」(バラの少年) を収録したアルバム『Ugly Beauty』を発売しているレコード会社、Sony Music Taiwan (台湾索尼音楽娛樂股份有限公司) のHPにある作品紹介文には、この曲に関して以下のような内容が書かれています。(内容理解と意識のためにDeepL使用・原文は中国語。<https://www.sonymusic.com.tw/album/jolin-tsai-ugly-beauty/>)

“Jolinとプロデューサーは、同性愛者や性的指向、容姿の異なる友人に代わって声を上げるような歌を作りたいと思った。”

“同性婚や性的マイノリティの権利などの人権問題に、彼女はずっと関心を持っていた。”

“この曲が自分が有するべき権利のために奮闘している人と、差別され傷ついた人々の魂を慰めることができると願っている。”

なお、この作品の歌詞は、台湾の国民的人気バンド五月天のメンバー阿信との共作です。事件が起こったのが2000年、楽曲の発表は2018年とかなり時間が空いているようにも感じますが、2018年に台湾で行われたことや台湾社会などについては、台湾在住の文筆家 栖来ひかりさんが、2019年5月18日にWedge ONLINEで掲載された記事「バラの少年少女たちへ。～台湾、同性婚法制化の道のり」(<https://wedge.ismedia.jp/articles/-/16244>) に詳しく書かれていますので、そちらもご覧頂ければと思います。

日本語と台湾音楽

今の30代から40代くらいの台湾人の中には、子どもの頃に祖父母から日本の童謡や唱歌を教してもらったので、歌うことができる人もいます。

台湾のシンガーソングライターであり、女優や執筆活動もする魏如萱 (Waa Wei) が、2021年にリリースした「奶奶」という曲の歌い出しは、日本の童謡「桃太郎」です。この曲はタイトルの通り、おばあちゃんとの思い出や感謝の気持ちを歌ったもので、歌詞に中国語、客家語、日本語が登場します。TAIWAN BEATSのインタビューによると、彼女の祖母 (2021年に91歳で健在) は、子どもに聞かれたくない話は客家語、普段の会話は中国語、そして日本語で「桃太郎」をよく口ずさんでいたそうです。(「異彩を放つ個性派女性歌手 魏如萱 心地よいサウンドの新作アルバム『HAVE A NICE DAY』リリース <https://ja.taiwanbeats.tw/archives/11037>)

また「奶奶」を編曲したシンガーソングライター

の林以樂は、2023年1月に日本でライブを行った際に、この曲を披露しました。このライブは入場無料の投げ銭ライブだったため、会場の墨田区・曳舟文化センターには、近隣のお年寄りもたくさん観に来ていました。彼女が「奶奶」を歌い出した瞬間に、驚きや懐かしさの混じった歓声が会場に響いたことを私は忘れられません。ちなみに彼女も祖父母が日本語教育世代だそうで、日本語の先生はおじいちゃんです、とステージ上で話していました。

前出の滅火器 Fire EX. は、日本のレコード会社からCDをリリースしていたこともあり、日本のバンドマンと親交があります。人気バンドマンとのコラボ曲をリリースしているだけでなく、東日本大震災後は被災地でライブをしたり、被災地でのライブハウスプロジェクトに参加したりと、被災地に寄り添った活動を続けてくれました。また、東日本大震災から10年経った2021年3月11日には、台日友好のための活動主題歌として「希望の明日」をリリース。日本語も混じる歌詞からは、彼らや台湾人の優しさが滲み出ていて、聴いていると涙が溢れてきます。2021年当時、コロナ禍で往来が出来なくなってしまっても台湾との友情は続いていることや、お互いを思い合う気持ちに満ちた心温まるロックナンバーです。

これからの台湾音楽と日本

インターネットの普及と発達により、海外アーティストの楽曲も気軽に聴けるようになりました。前出のシティ・ポップと同じように、私たちも日本にいながら世界中の音楽が聴けるようになっていきます。インターネットなどを介して知った自身の好みの音楽が、北米や欧州のいわゆる洋楽ではなく、アジアの音楽だったという経験を持つ人も増えていると思います。

先日、軽井沢町で「EPOCHS」という日本の音楽フェスが開催され、そこに台湾アーティスト3名が特別編成を組んで出演すると知り、私も観に行きました。出演したのは、ラッパーLEO王(リオ・ワン)、ネオソウル系シンガーでドラマーの雷撃L 8 ching (レイチン)、70年代風と浮遊感の音が混ざるアーティスト雲端司機 CLOUDRIVERとい

う、台湾の注目株のアーティストです。

音楽フェスは、基本的に会場内に複数のステージがあるので、お目当てのアーティストのライブ以外にも、今まで知らなかったアーティストのライブを観たり、新しい音楽を知ったりする機会にもなります。良いライブが行われていれば、自然とそのステージに人が集まります。人が人を呼んで、大いに盛り上がり人気を博していく。その日のライブひとつで、知名度が一気に上がることもあるのも、フェスの面白さです。

台湾アーティスト3名のステージは、曲が進むごとに観客が集まり、歓声や拍手も大きくなる、まさにフェスの理想形に近いものでした。私の横にいた20代くらいの男女グループの観客が、「知らないアーティストだけど、みんなすごくカッコいい！」と興奮気味に話しながら、音楽に合わせて体を揺らしてライブを楽しんでいました。40分ほどのライブは、スタートした時と比べて何倍ものお客さん集まり、拍手と歓声が湧き上がり大盛況で終わりました。

少し前なら、フェスなどで観て気に入った海外アーティストがいても、日本でCDが入手できず深掘りが難しかったかもしれませんが、いまはインターネットなどで容易に情報収集ができますし、関連するアーティストも知ることができます。昔に比べると、変なバイアスをかけずに、自分だけのお気に入りの音楽を探せるようになったなと感じます。また、日本の人気アーティストと台湾のアーティストがコラボした作品も、毎年のように発表されていますので、「台湾音楽＝歌謡曲」



「EPOCHS」の台湾音楽ステージはたくさんのお客さんが集まりました

というイメージだけではなくなくなっているように感じます。

最後に

私が台湾に初めて行ったのは、2006年頃でした。当時、会社員だった私は夏休みを利用して、手近な海外旅行先に行きたいなと思い、台湾を選びました。台北の街でベンチに座っていると、日本語教育世代と思われる方たちが、ニコニコと話しかけてくれて統治時代の思い出を語ってくれたことに非常に驚きました。当時、私が台湾に関して知っていたことは、1895年からの台湾統治と1945年の終戦という2つだけでした。私の祖父は、戦時中に台湾にいましたが、当時の話をほとんど聞くこともなく、20年以上前に他界しています。

初めて台湾に行ってから15年近くが経過した頃、縁があって台湾の音楽をたくさん聴くようになりました。ただ聴くだけではなく音楽を通して台湾社会を知りたいと感じているのは、あの時に日本語教育世代の方達と出会って、衝撃を受けたことも原動力になっているように感じます。また、自分の祖父が当時、台湾のどこにいたのだろうか？なども考えてしまうこともあります。

音楽は、人々の生活の中から生まれてくるものであり、その曲が発表された時の社会的背景や考え方などとも結びつくものだと感じています。「歌は世につれ、世は歌につれ」と昔から言われていますが、まさにその通りだと思います。私は、日本と台湾がお互いに大切な存在であり続けてくれることを願っています。また、音楽を通じた日本と台湾の相互理解の一端に、この文章がなれば幸いです、僭越ながら思っています。

参考文献

『台湾を知るための72章【第2版】赤松美和子・若松太祐（編著）／第37章 性的少数派 劉靈均著

参考サイト

「みんなの修学旅行ナビ」(SNET台湾)ジェンダー平等教育協会

https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/218/